
転生して目指すはサポート役

星皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して目指すはサポート役

【Nコード】

N3887BA

【作者名】

星皇

【あらすじ】

神にその能力を欲っしられ友人とともに殺された。目の前に現れたのは最高神。もらった力で目指せ脇役。オリ主を目指す友人を助けるぜ。

友人たち以外にも転生者を出すつもりですが、あくまでもつもりです。

第0話（前書き）

毎日更新目指しますが、なにぶん作者は学生です。

ご了承してくれたら、ありがたいです。

感想など返せないかもしれませんが、なるべく返していこうと思います。

つたない文ですがどうぞよろしくお願いいたします。

第0話

気が付いたらあたり一面が白い世界だった。

・・・ん？二次小説のような始まり方だな。

確か俺は仲間とキャンプで・・・
馬鹿みたいに騒いで寝たはずだ。

「・・・これ夢か」

「いや残念ながら夢ではない」

「!？ 誰だ！」

目の前にはかなり筋肉質の男がいた。

髪は白、きれいな白、なににも染まらない色だ。

「わしは神

だ」

「？ (なんだ聞き取れなかったぞ)」

「おお、すまん。又シらのような者たちでは理解できぬ言葉じゃったか。

そうじゃな又シらの世界の言葉であらわすと『ゼウス』『オーデイン』と言ったところかの。」

「神様なんですか？ これは夢じゃないんですよね」

「意外と順応が早い。死ぬ直前を思い出したか？」

「それはまだわからない」

「ほう。ならなぜそう思う」

「俺の直感によく当たるんです」

「さすがじゃな。それはなはるか昔に又シの先祖にわが眷属が暇つぶしに与えたものじゃ

ざっと500年前かのう。まあいつか又シのような者に発現するよにしてあったものじゃが」

そっか神がこの直感を本物というならそうなんだろう。

そして直感俺に告げてる。

この神は本物だと。

「話がそれだな。本題に入ろう、又シらの死因は我々にある」

「どういうことだ？二次小説だと結構『普通に死んだが抽選で・・・』

とか『お前は異端だったから』

『本来死ぬはずの人間を助けてしまったから』とかもあるだろ」

「いや、それ以外にもむしろ同じ理由もあつたはずじゃろ」

この神は意外と人間の生活を

「のぞいておるよ」

！??心をよまれた。

まあ神だから仕方ないか。

「神じゃからな。まあそれでの一部の神がわし等上位の神に反乱したのじゃ。」

それで又シの直感を手に入れるために又シ等を殺し手に入れようとしたのじゃが、

又シ等を殺したあとすぐわし等に見つかったのう、すぐに鎮圧したというわけじゃ」

「そうなのか。ん？又シ等？」

「そうじゃあやつ等は又シのキャンプの日に決行した。」

又シの友人を巻き込んだのう」

・・・俺を殺すためにみんな・・・殺したのか？

「・・・俺のせいでみんなは殺されたのか？」

「又シのせいではあるまい。責任は神にある」

「でも、夢のある奴だった。それなのに俺のせいで叶えられないんだろ」

涙がこぼれてきた。畜生、畜生。

「畜生が！」

「そう、自分を責めるでない。アフターサービスをしっかりするから安心せい」

「アフターサービス？」

「そつじや 転生させてやる」

転生？あれか？二次元の世界にとかのあれか？だめじゃないのか？

「そつ気にするな。わしは最高神じゃぞ。なんでもできるぞ。安心せい」

「本当にいいのか？」

「ああ、と言つても転生する世界は限りなくその物語の世界に近い世界じゃ」

そつかならあらなるべく争いのなさそつな世界がいいかな。

「ちよつと待て。又シ一人で決めることもなかるつ。又シと一緒にここに来た者たちと決めるがよい」

神は指を鳴らした。

「あれ、どこどこ？」

「俺は確かキャンプしてたよな」

「うつん。もう食べられないよ」

「そろつたかのつ」

現れたそいつらは一緒にキャンプしていた幼馴染だった。

「あ、『蓮』ここどこ？私たち自分たちの寢床で寝てたはずだよね？」

「『葵』ここはなんというか」

「いや、蓮。俺には分かったぞここは天国であって天国ではない世界だな？」

そして俺たちは神によって間違っつて殺され、転生させられるんだろ？」

驚いたさすが『幸也』ヲタクオブザヲタクとよばれてなかったな。神様啞然としてるぞ。

「又シの友人はすごいおう。神以外にも心が読めようとは」

神様違うんです。こいつ転生ものの二次小説大好きなだけなんです。

「うっん。あれ、蓮君。もう朝なのかな？すごく眩しいね」

「『優奈』実はな」

みんなに説明する。幸也がなんか説明終わると震えだした。

「転生きたああああ！なんだどこの世界に行くんだ？特典はいくつつけられる？」

俺はオリ主になるぞお！！！！」

・・・こいつ馬鹿だったな。

「そっか死んじゃったんだね？」

「・・・葵」

「家族に謝りたかったな」

葵は大家族の三女だったかあの家族とももう会えないんだもんな。

「お父さんもお母さんもきつと悲しんでるよね。」「ごめん。」「ううん。蓮のせいじゃないよ」

蓮の直感に助けてもらったことだって何回もあったんだから」

葵の言葉にまた泣きそうになる。

「やさしいね葵」

優奈はそう言って葵を撫でている。

「優奈はいいのか？」

「大丈夫家族とは仲悪かったから。仲直りできないのはちょっとこころのこりだけどね」

『パンパン』手が鳴った。

「さて互いの現状が分かったところで、まず転生先を決めようかのう」

神が本題に入った。

はいはい、と幸也が手を挙げる。

「リリカルなのはの世界にしようぜ」

リリカルなのは？確か小学三年生だったか四年生だったかの少女が魔法少女になるって話だよな。

「その世界は安全なのか？」

俺が気にしているのは安全性の三文字
戦争に駆り出されるのはごめんだからな平和に過ごしたい。

「いやな、裏の世界に手を出さなければ結構大丈夫な世界だぜ」

魔法は裏の世界が基本なんじゃないのか？

Fateとかそうだったはずだろ。よく知らんが。

「別にいいんじゃない？あたしあのアニメ見たことあるけど。幸也の言った通り

裏に手を出さなければかなり安全だったはずだよ。うる覚えだけど」

葵見たことあるのか。アニメは小学校四年生ぐらいまでしか見てなかったな。

ずっと小説とマンガ読んでたし。どっちかというと原作はだった。

「二人がそういうなら俺は別にいいんだが、優奈はいいのか？」

優奈はアニメとか見ないからこの手の会話にはついてこれなさそうだけど。

「うん。わたしはアニメとか見たことないし。二人に任せるよ」

「ならリリカルなのはの世界だ」

どうでもいいが幸也。テンション高すぎだろ。

そんなに転生がうれしいか。家族はってあいつ一人暮らしたったな。親父とケンカして家出だっけ？

「そうか、では俗にいう『特典』を決めようかのう」

「俺は身体能力が真祖の吸血鬼並みで魔力値がSSSで『王の財宝』。中には宝具全種で投影魔術もつけてくれ」

おいかなり強くないか。

「他にはないのか？」

神様まだあげるのか。これ以上なにをあげるんだ？

「こんなもんで別にいいだろ欲張りすぎな気もするし」

やめたか。幸也にしては意外と謙虚だな。裏があるのか？
そう思った俺は別に悪くないだろう。きっと

「あたしが次言っつていい？」

「葵君かいいぞ」

葵は何を言っつんだ？戦うのか守るのか。

「あたしは結界と長距離転移を可能にして欲しい。それ以外は別に
いらないよ。」

強すぎる力を持つと不幸になるかもしれないから」

なんかマンガっぽいこと言ったぞ。

「私は回復に特化した能力が欲しいです」

優奈は回復か医者になりたいって言ってたもんな。

「欲がないのう。一人を除いて。さて又シはどうするのじゃ？」

俺の番か。さてどうしたものかな。

「そのリリカルなのはの世界には戦闘があるんだよな？」

「そうだけ。非殺傷設定魔法とか使ったりするけどな」

非殺傷？魔法を殺さないようにするのか便利だな。

「ふむ、なら俺の部屋にあるライトノベルやマンガの知識をすべてくれ」

「いいのか？戦闘向きではないぞ？」

「戦闘系は全部幸也一（馬鹿）に任せるからな。バックアップだな」

「蓮、今バカって言ったよな」

馬鹿が何か言っているが別にいいだろう。

「オリ主目指すんだろ下手に俺がいたらお前の夢が潰えるかもしれ

ないだろ」

幸也ははっとした顔で

「すまん蓮さすが知将だな。そこまで考えていたなんて」

(相変わらず蓮は幸也の扱いがうまいよね)

(そうだね幸也は結局蓮の手の平で踊ってるのにね)

あ、そうだ。

「俺たちの生活はどうなるんだ？」

「又シ等の生活はもう決めてある安心せい。少しぐらい不自由でも構わんじやる」

そっかこいつらと離ればなれは嫌だしな。

「原作ブレイクしてもいいのか？」

幸也は本当にオリ主になるつもりか。

「ああ、さっきも言ったが原作に限りなく近い世界の二つじゃかな。な。

世界の修正力なんてものは働きはせんよ」

よしよし、と息巻いてやがる。

「さて、質問は終わりかのう。なら頑張ってくるのじゃぞ」

俺たちの後ろに扉が現れる。

「又シ等の人生に幸あれ」

「行くか」

みんなにそういうと返事が返ってくる

「おう」

「うん」

俺たちは光に包まれた。

第0話（後書き）

一応他の転生者を出すつもりではありますが、あくまでもつもりです。
やっぱり銀髪オッドアイとか見てみたいですよね。

第1話 く状況確認と能力を使うためにくその1（前書き）

今回は前回と違って短めです。

第1話 状況確認と能力を使うためにその1

蓮 side

眩しい光を浴びて目を開けるとそこは子供部屋だった。
ぬいぐるみがいくつもある。少なくとも自分の部屋にはなかったはずだ。

「ここはどこだ？」

(蓮よ聞こえておるか?)

神様の声が頭に響く。

「神様か?ここはどこだ？」

(又シ等の今の情報を教えておこうかと思つてのう。)

「助か・・・ん?声高くないか？」

(又シは現在肉体年齢が4歳ほどじゃからのう。原作は5年後じゃ。それまでに能力を使いこなすといいじゃろう)

「そうか。でここはどこだ？」

(おおっと。そうじゃったな。又シ等は孤児院に入っておることになっておる。

それまでの記憶を脳に焼き付けておこうかのう)

「っ痛」

頭に割れるような痛みが走った。
正直二度と味わいたくない。

（又シのだけ記憶を入れるのを忘れとった。他のものは寝ている間にいれておいたぞ）

神様！めちゃくちゃ痛かったぞ。

（又シの能力はそれだけだと原作が始まるまで使えんからのう。これを使うとよい）

目の前に銀色の球体が落ちてきた。

「なんだこれは？」

（その中に必要なものが入っておる。時間の流れが違つからのう。じゃが老化はせんようにしてある。）

あれか・・・ご都合主義、テンプレってやつか。ありがたいけど。

「さっそく使ってみるよ」

（そうじゃな。起動方法は『ルート・イン』じゃ）

「『ルート・イン』！」

風景が変わる。研究室のようなところに入る。

(端末に触れ。目の前の画面に手をあてるのじゃ)

これか？

手をあててみる。

《マスターを承認します。》

無機質な女性の声が聞こえる。

《マスターの名前を入力してください》

「高坂《こうさか》蓮」

《承認しました。よろしくお願いします、マスター蓮。次に私の名前を入力してください》

こいつの名前か？AIって感じだから

「よし、お前の名前は『アイ』だ」

《了解しました、マスター蓮。》

さてここから出るにはどうしたらいいか。

(ここから出るには『ルート・アウト』で出られるぞ)

まだいたのか。いや見てたのか。ほんとに助かるな。

「『ルート・アウト』！」

風景がまた変わった。

目の前には葵の顔がドアップで現れた。

「／／／ 葵。近いぞ」

「／／／／／ごめん」

真っ赤になっちゃって、俺もだけど。

「ってか昔の葵そのままだな？」

「蓮もそんな感じだよ」

お互い4歳児になっちゃったからな。

「で、どうした？何か用があるんじゃないのか？」

「何って、顔見せだよ。お互いどうなってるのか知りたいし本当に離ればなれになってないか気になって」

「そっか優奈と幸也もいたのか？」

「うん。みんな同じ家だね」

孤児院だったな。設定だと俺たちは同じ日に捨てられてこの院長先生に拾われたのか。

「俺たち以外に孤児はいないのか？」

「結構前に一番上が出ていったらしいよ。記憶によると」

俺たち4人と院長先生か物語にかかわってたか。

「それでね。ご飯だよ」

みんな待ってるよ。と葵がせかす。

「すぐ行くよ」

そうして新しい人生が始まる。

） 蓮 side out ）

第1話 〽状況確認と能力を使うために〽その1（後書き）

次回も能力を使うために・・・です

原作まではもう少しかかるかな。

第2話 く 能力把握 く その2 (前書き)

今回はご都合主義満載です。

・・・案外それほどでもないかも。

第2話 〉 能力把握 〉 その2

〉 蓮 side 〉

朝食を終えみんなで俺の部屋に集まる。

「さて状況確認。するから俺につかまって」

「ん？なんで蓮につかまるんだ？」

「神様に研究室をもらったからそこでしょうっと思っ。能力もそこで使うといいと思うよ」

「いいもんもらってんだな」

そう言ってみんなが俺につかまる。

「コホン。では、『ルート・イン』！」

〉 蓮 side out 〉

〉 幸也 side 〉

蓮がキーワードを言うと風景が変わった。
研究室・・・か？

「神様によるとこの世界では外と時間の流れが違っらしい」

おま・・・それネギまじゃねえか

「アイ聞こえてるんだろ？」

アイ？なんだそれは？

「蓮。アイって何？」

葵も聞いてくる。優奈も不思議そうだ。

「アイはこの世界の管理人みたいなものだ」

《お呼びでしょうか、マスター蓮》

おお。インテリジェントデバイスのAIみたいなもんか。
葵も納得がいったようだ。見てたんだけか？
優奈は普通に驚いてるみたいだけど。

「おお。アイちゃんは人工頭脳なのかな？」

天才か！？優奈はアニメとか見ないはずなのにもう理解してるのか？

《その通りです。》

「それで、訓練室はあるか？なるべく頑丈なやつ」

《はい、ここから転送しますがよろしいですか？》

「ああ、頼む」

かしまりました、とアイが言う。
足元から魔法陣みたいなものが現れ光が俺たちを包む。

〈 幸也 side out 〉

〈 葵 side 〉

光に包まれたと思ったたら今度は草原にいた。
幸也は水を得た魚みたいに生き生きしてる。

「さっそく能力使おうぜ」

私は転移系だからどうするんだろ？
思い描けばいいのかな？

「じゃあ俺から行くぜ。『トレースオン』!!」

幸也の手に剣が現れた。
・・・いやフオークか。

「へたれ」

ぐさ！擬音語が聞こえてくるみたいだ。
つい声に出ちゃったみたい。

「ち・・・違っただちよつとためしに「失敗するかもしれないから簡
単のをだしたんだよな」
違っただあああああ」

幸也が走ってどこかに行ってしまう。

相変わらず蓮は幸也いじりがうまい。

「やりすぎじゃないの？蓮」

優奈が心配して言うのが説得力がないちょっとにやけてるよ。

「幸也だからな。あと6分でケロツと戻ってくるだろ」

リアルな数字だ。ちなみに蓮がこう言うのと外れたことがない。

「さて優奈の能力は今発動できないが、葵。お前ならできるだろ」

ううん。どうやってやるのかな？

「神様にやり方のメモもらったからこれ見ろよ」

そんなのあるんだったら早く見せてよ。

すまん、すまん、と蓮は言うが絶対に悪いと思っ
てない。そういう顔だ。とにかくメモ見てみるかな。

〈 葵 side out 〉

〈 蓮 said e 〉

あれから6分で幸也が戻ってきた。

優奈の能力か。幸也と組手でもやるか？

「優奈の能力は願えばいいらしい」

「願う？」

「そう。この人に元気になってほしいって願っただけ。本気で思はないといけないけど」

「意外と簡単だね。もっと難しいと思った」

「回復魔法ってそんなもんじゃないのか？小説やゲームだと高等技術にあたるはずだけど回復ってやっぱり願いだと思っただ」

「けどまだ使うことないよね。誰もけがしていないし」
痛いのはやだけど。

「幸也、フォーク貸して」

「ん？いいぞ何に使うんだ？」

フォークを受け取ってそのまま自分の掌におもいつき突き刺すザシュ。いやな音が響く。

「っ！」

めちやくちや痛い。

「！何してるの！？」

優奈はかなりびっくりしてるがこれも優奈の能力を見るためだ。

「ゆう・・・な、能力使って治してくれ」

ちよっと躊躇したようだがすぐに祈るように手をくんで、

「おねがい治って！」

俺の手に温かい光が溢れたと思うと傷口が完全にふさがった。

「ありがとう、優奈」

優奈が泣きそうな顔をしていたので頭を撫でてやる。

「あ／＼／」

「ごめんな、優奈の能力を発動させてコツを掴ませてやりたかったんだ」

ふう結構痛かったが回復の瞬間はかなり気持ちよかったな。

これ、怪我がなくても体全体をリフレッシュできるんじゃないか？

「馬鹿野郎が、心配させやがって」

幸也にも悪いことをしたな。

幸也の能力で傷つけたんだから。

「まあ説教は後ろの方にまかせるけどな」

死ぬなよ、と幸也が目で言ってくる。

振り向くと黒いオーラを出した般若いや生ぬるいな直感が告げてる。

あの神様を超えていると。

この日また優奈の能力の世話になった。

蓮 side out

第2話 能力把握 ーその2 (後書き)

次回はそれから少し経たせます。

神を超えた葵の威圧

その力は魔王か夜叉かそれとも

第3話 主人公との出会い、いざ翠屋へ（前書き）

原作まであと少しにさしかかろうかな

第3話 　　主人公との出会い、いざ翠屋へ

　　蓮　　s i d e　　

　　転生して1年が経った。まあ充実はしていた。

　　この体はまだ5歳児遠くへ行こうなんて思えない。

　　知識を使ってアイとこっそりデバイスを作っていた。

　　原作になったら幸也に渡そうと思う。

　　デバイスなしで魔法を使ったら。きっと実験動物だ。

　　そうならないといいな。

　　そうそう、翠屋というところに行ってみた葵と優奈が公園に行くと高町なのはという女の子が1人でさびしそうにしてたから遊んだ。

　　そしたら翠屋に招待されたからって、幸也はあのイベントかあとうるさかったが。

　　というわけで俺たちは現在翠屋の目の前にいる。

　　「ここが主人公の家か？」

　　「ここが魔窟か」

　　幸也お前かなり失礼なことを言ってるぞ。

　　「入ろうか」

　　優奈は甘いものが好きだからな

　　「いいか忘れるなよ俺たちは5歳児なんだからな」

店に入ると女性が出てきた、かなり若い。バイトさんかな？

「いらっしやいませ。4名様なのかな？」

こんな子供にも敬語を使うのか。さすが従業員尊敬する。葵が代表して言う。

「私、向日へひゅうが《葵》っていいいます。なのはちゃんいますか？」
店員さんが驚いた顔をする。

「あなたが葵ちゃんね。なのはから聞いているわ。
私は高町桃子。なのはのお母さんよ」

お母さん！？若すぎだろ。

「なのはちゃんのお母さんでしたか。私は黒羽《くろばね》優奈です。

葵は前世と同じ日向の苗字だ。合わせるとヒマワリなんだよね。
優奈も前世と同じ苗字んだけど、読み方が違った。くろばだった
のだが。

「後ろの男の子は・・・」

そっいつて俺と幸也を見る。

「俺は井口幸也です」

幸也は前世と全く違った。前世は佐藤だったな。

「僕は高坂蓮です」

俺は一応使い分けている。

やっぱり子供のうちから俺はだめだと思っただ。

「そう。なのはを今呼ぶから、カウンター席で待っていてね」

そっいつて桃子さんは店の奥に行ってしまった。

しばらくして、なのはちゃんがやってきた。

「ごめんね。おまたせ」

けっこうかわいいな。前世の目線で見ると上の上っていうだろう、
幸也なら。

「あおいちゃん、ゆうなちゃん。そっちのふたりは？」

なのはちゃんが俺たち二人を見て言う。

俺たちも自己紹介をした。

友達が増えるのがうれしいんだろう。

「うん。うん。れんくんにつうやくんだね。よろしく」

「ケーキ食べに来たんだよ」

優奈。もう我慢できないのか。

「おかあさん、おいしいケーキみんなにだしてね？」

なのはちゃんも張り切ってる

「はいはい」

桃子さんもなのはちゃんに友達ができて、楽しそうにしてくれてうれいんだろつ。

幸也が言うにはこの頃なのはちゃんのお父さんが事故で入院して一人ぼっち遊んでいたんだが、葵や優奈と出会って、さみしいことを家族に打ち明けてくれたんだろつ。

幸也がなのはを攻略するためにあいつらより先に声をかけるつもりだったようだが。

邪心はだめだったようだな。

〈 蓮 side out 〉

〈 桃子 side 〉

今日はなのはの友達が店に来るって嬉しそうに言っていた。

土郎さんが事故で入院してから美由紀も恭也もなのはにかまっついてられず

さびしい思いをさせてしまった。

あの日なのはが決意したような目で私と美由紀に言ったことはまだ頭の中に残っている。

『さみしいよ。もうひとりはいやだよ。』

その瞬間私たちはなのはに抱き着いていた。なのはにさびしい思いをさせてはいけない土郎さんが戻ってくるまでこの店を守ってなのはと一緒に笑顔でむかえるから。

)
桃子
s
i
d
e
o
u
t
)

第3話 主人公との出会い、いざ翠屋へ（後書き）

次回は閑話

閑話 くなのはその日(前書き)

なのはと葵、優奈の出会った日です

閑話 くなのはのその日

きょうはあおいちゃんとうなちゃんがおみせにきてくれるひなの。おとうさんがおしてにゆういんして、おかあさんはおみせがいそがしくなって、

おにいちゃんはこわいかおをしてたかぞくをまもるんだっていつてたの。

おねえちゃんもおかあさんのてっだいでいそがしいんだって。

ひとりになっちゃった。すぐさみしかったの。

でもさみしいっていつちゃったらめいわくかけちゃうからいわないの。

でも公園で遊んでいたらなみだができてひとりでないでいたの

「う、ひぐっ、さみしいよ」

「どっして泣いているの？」

おんなのこがふたりこっちにやってきた。

あわててなみだをふこうとするがとまらなかったの。

「あれ？とまらないよ」

おんなのこのうちひとりがわたしのあたまをなでてくれたの。

「あっ」

「泣きたい時にはね泣いてもいいんだよ」

わたしはそれをきいたときとめようとするのをやめた

「う、うわーん」

おおごえでないた。よしよしってなでてくれた。

もうひとりのこもねでてくれた。

わたしがじじょうをはなすと

「お母さんに言うつというよ自分の本当の気持ちを」

「でも・・・」

もしかしたらわがままなこっっておこられるかも。

「そんなことないよきつと大丈夫。だからね」

おんなのこがウインクする。

「友達になろうよ、私は優奈だよ」

「私は葵よ」

ともだちができたそれもふたりいっぺんに。

「あなたのお名前は？」

ゆうなちゃんがきいてくる。

「わ、わたしはなのは。たかまちなのは」

「なのはちゃんだね。今日はもう遅いから明日またこの公園で遊ぼうね」

わたしはとってもうれしくなったの。
またあしたもあえる。あそべる。

「じゃあねなのはちゃん。またあした」

「うん。またあした、ゆうなちゃん、あおいちゃん」

そういつてわたしはいえにかえったの。

おうちにかえるとおかあさんとおねえちゃんがいたの。
わたしはいうことにしたの。

「おかあさん」

「なに？なのは。」

なみだがでてくる。

「さみしいよ。もうひとりはやだよ」

おかあさんはわたしをだきしめてくれた。
おねえちゃんもだきしめてくれたの。

「ごめんね。ごめんね。」

おかあさんとおねえちゃんはないてあやまってくれたの。
とってのうれしいいちにちだったの。

閑話 くなのはその日々（後書き）

原作まであとすこしです。

第4話 く小学校生活と波乱の予感く（前書き）

結果出したよ。

複数好きだからね

第4話 小学校生活と波乱の予感

蓮 side

「人生2度目の小学校か」

小学校1年生になった。なってしまった。

「子供らしく振舞うのってすごく難しいんだよね」

「「はあ」」

葵と揃ってため息を吐く。

今日は入学式。入学式だくだいようだが何度でも言おう。
人生2度目の小学校1年生の入学式。

「精神は肉体に引つ張られる？だったか優奈はかなり順応早かった
もんな」

「そうだね。幸也も結構それっぽかったもん」

まあどうにでもなるか子供のころの印象が『大人びてる』てたつて
いうのは
よくあることだしな。

「なんとかなるよね？」

「まあ問題はないんじゃないか？テストだって楽だろう？
ひどい点数なら笑ってやる」

安心しろ。

教室に向かうとなのはちゃんがいた。
優奈と話している。

「おはよう。なのは」

俺は声をかける。前にちゃん付けがしつかりこず、呼び捨てにした。
なのはも気にしていない。葵はまだちゃん付けだが。

「おはよう蓮君、葵ちゃん」

「おはよう。なのはちゃん」

葵も返す。

「今日、幸也くんどうしたの？」

「え〜と、幸也のやつ今日は風邪引いちゃってさ」

そう珍しいことに幸也は風邪を引いた。

初だそう。吸血鬼並の身体能力でも吸血鬼ではないからなのだろうか。

「そうなんだ。大丈夫かな？」

幸也はなのはを攻略するといつて、かなり優しく接してたからな。

なのはも『優しい人』と思ってくれているだろう。

そろそろ先生きそうだな。

「あ、先生来たみたい」

優奈が確認する。さすが直感これはテストの山もあてるからな。重宝してる。さて席に着きますか。

） 蓮 side out ）

） なのは side ）

入学して早数日クラスのみんなと仲良くなりました。何人が話しかけてない人もいるけど。

・・・あれ？なんか教室がさわがしいな？

「ねえ、返してよ！」

えっと確かすずかちゃんとバニングスさん

「お願いだからかえしてよ」

私はとつさにすずかちゃんとバニングスさんの間に入って、パシッ！バニングスさんの頬をたたいていた。

「痛い？でも大事なものをとられちゃった人の心はもっともっと痛いんだよ」

「なにするのよ！」

バニングスさんと組み合う

周りの子も驚いているがそれどころではない。

「やめてえー!!」

すずかちゃんの大声で私たちは止まってしまっ

「そっだよ女の子が取っ組み合いだなんて」

優奈ちゃんも葵ちゃんも一緒に止めてくれる。

「ごめんなさい」

バニングスさんも謝ってくれる。

「私もごめんなさい」

「はい、これ」

バニングスさんがすずかちゃんにヘアバンドを返してあげる。
優しい子なんだよね。

「本当にごめんなさい」

「返してくれたから、別にいいよ」

すずかちゃんも優しい子だ。

「仲直りの握手しなさい」

優奈ちゃんがそっ

バニングスさんが驚いた顔をしているが、手を出してくれる。

「私は高町なのは」

「あ……アリサ・バニングスよ」

仲直りしたから今日から友達なの。

「よろしくね。アリサちゃん」

その日はすずかちゃんとも仲良くなれたの。

〈 なのは side out 〉

〈 蓮 side 〉

なのはが何かやらかしたらしい学校に着くとなのはが、金髪の子、確かアリサ・バニングスだったかと握手してた。何があつた、そしてなぜ幸也は残念そうにしている。

「幸也何があつた？」

「蓮。今日はなのはとアリサ、すずかの親友になるきつかけができる日だったんだ」

そつかよかったじゃないかなのは。

親友と呼べる人なんてすくないだろ？

葵達と出会った時なんてさ、友達がほしかったんだろ。

「はーい。皆さん席に着いてください。今日は転校生を紹介します」

転校生？入学してまだ数日だぞ変じゃないか？

「では、アルトリア・ジークフリート君入ってきてください」

はい、と凜とした声が響く。

そいつが教室に入ってきた。

俺の隣は幸也だがそつちを見ると驚いた顔をしてる。

それもそうだろう。銀髪。まあそれは外人っぽいからまだいいだろう。

オッドアイ、赤と青これは極め付けた。

直感に頼らなくてもわかる、こいつ転校生だ。

「アルトリア・ジークフリート。アーサーってよんでくれ」

にこつと笑顔を見せる、ついでに歯が白い。

よく見ると何人かの女子がときめいているようだ。

「これは・・・ニコポだと!？」

幸也がうろたえている。

この反応を見ると笑顔を見せるとやつにときめくようだ。

魅了《チャーム》ってやつか。

こいつが幸也の好敵手だな。

） 蓮 side out ）

第4話 く小学校生活と波乱の予感く（後書き）

この冬休み中に出せるとこまで出そうと思います

第5話 〽原作突入までのカウントダウン〽 (前書き)

今回はパス

第5話 〱原作突入までのカウントダウン〱

〱 蓮 side 〱

原作開始まであと数日といったところか
三年生になりなのはもすずかやアリサと一段と仲良くなった。
俺たちもすずかやアリサと仲良くなった。
今日は翠屋にお邪魔している。

「にしても、あんた達ほんとアルトリアに嫌われてるよね」

そうなのはやすずか、アリサと仲良くしている俺や幸也をとことん毛嫌いしている。

「いうなよ。かなりまいってるんだ」

幸也はあいつとライバル関係だからわかる。
だが、俺はもう露骨だ。常に本を読んでいるからなのか、あいつは邪魔ばかりしてくる。
俺の本を傷つけないだけまだましか。

「僕はケンカする気ないんだけどね、しつこいよ」

ふう。おっとため息が出ていた。幸せが逃げるな。
相乗こうかでもっとにげるんだろうな。

「一度ガツンとやってやればいいじゃない」

そうは言うがなアリサ、俺はこれでも優等生で通しているんだ。

下手にケンカなんてできない。

「あたしが一回怒鳴ろうか？」

葵もそういつてくれるか。ありがたいな

「けど葵もあいつに好かれてるだろ。逆効果だよ」

きつと『あいつに言えって言われたんだろ？なんてやつだ俺が天誅下してやる』

なんて言うかもしれない。天誅はないか『根性叩き直してやる』かな。

「頭も撫でようとしてくるのよ！」

幸也曰くナデポらしいニコポと同じ効力を発揮する。

2つを同時に使うことで効果が増すらしい。

幸也は選択しなかったもんな。

好きな子は自分の努力で攻略するらしい。

「まあどうにかなるさ、そのうち飽きるだろ」

「でもその言葉、アルトリアが来てしばらくしてからも言ってたよ」

すずか。・・・そういえばなんか言ったことあるような。

「今年で2年目ね」

アリスもそんなこと言わないでくれ、心がえぐられるようだ。

優奈。食べるのやめてそろそろ会話しようぜ。

何個めだ？もうワンホール食べたんじゃないのか？

その日の夜

『誰か僕の声が聞こえる人、力を貸してください』
脳に響く、念話だ

「そっかついにこの日か、原作のはじまり」

幸也が言っていた。この声はユーノ・スクライア。

ジュエルシードというロストログアを集めるためにやってきた魔法世界の住人

「それでどうするの？」

葵も聞く俺たちは幸也の野望を実現させるためのバックアップだからなあ。

「とりあえず、俺が原作に加わる。なにか大問題が起きたらその時は頼む」

まあ、そんなところだろう。

あ、そうだ。

「幸也。アルトリアがかなり邪魔なようなら俺も加わる。」

「そうだな、大問題なんてそうそう起きないとは思うが。お前も関わるつもりだったんだろ？」

ばれてたか、でも裏方を貫き通すつもりなのは構わない。

無印では目立った原作ブレイクはないがプレシアを救うぐらいだろう。

「技術職についたんだ。プレセアぐらい救ってやる。かつこ悪いとこ見せんよ」

ほれ、と例のものをやる。

「ん？これはまさか。」

「そうデバイス。一応インテリジェントだから、ご希望通り女性型マスター認証して」

「サンキューな。よし、マスター承認、井口幸也
術式は古代ベルカ式、愛称『ラルフ』、正式名称『ランドルフ』」

ちなみに、音声はミクをイメージしてある。

この世界にはボーカロイドがないしな。

《認証しました、マスター。では、バリアジャケットの構想をお決めください》

「ああ、行くぜランドルフ！セット、アープ」

幸也が光に包まれた。

幸也のバリアジャケットは銀と白所に黒を混ぜた、ジャッチメントコートそっくりだ。

「かつこいいね幸也」

「見違えるよ」

葵も優奈も褒めだす。

「どうだ、違和感ないか」

「ああ、かなり気分がいい」

よし、試作機も完璧なようだ。

「明日からがんばれよ」

「ああ。あの野郎も出張ってくるだろうからな」

アルトリアのことが。

俺も戦いたいな、つぶしてやる。

おっと裏方、裏方。

しかし俺の特典も捨てたもんじゃないな。
いろいろできそうだ。

く 蓮 side out く

第6話 　　～原作開始～

　　～　なのは　side　～

今日は変な夢をみてしまった。
不思議だったなあ。まあ夢だもんね。

昼休みみんなでお弁当を食べていると
今日の授業のお話をしたの。

「将来かあ、みんなはどうするの?」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して、
跡を継ぐかな」

アリサちゃんは跡を継ぐのかあ。

「わたしは機械好きだから、工学系で専門職がいいかなって思っ
てるよ。」

すずかちゃんは理科系得意だしね。

「僕はすずかと同じだね、とりあえずそついつ専門職に就こうとお
もってるよ。」

蓮君もすずかちゃんとおなじ

「私は、お医者さんになりたいなあ」

優奈ちゃんはお医者さんかあ

「俺は未定だな」

幸也くんは・・・まあしかたがない。

「葵ちゃんは？」

「私は・・・」

ん？幸也君と同じなのかな？

葵ちゃんは手招きする。私とアリサちゃん、すずかちゃんは耳を近づける。

優奈ちゃんは知ってるみたいだ。

「（実は／＼・・・お嫁さん）」

「「「ええっ！！？」」「」」

「それは職業じゃないんじゃない？」

その通りだよすずかちゃん・

「い、いいの満足できれば」

「誰の？」

「アリサちゃんわかるでしょう」

優奈ちゃんはそういつて蓮君を見る。

「「「ああ「「「

納得なの。すごく優しいもんね。

「そ、そういうのははどうするの？翠屋2代目なんでしょ？」

「うん。それも将来のヴィジョンの1つではあるんだけど」

取柄もないしね。

「なのは、あんた取柄ないなんて思ってるんじゃないでしょうね？」

うぐ。

「そんなことないよ」

「そう、ならいいのよ。そんなこと言ったらおこったからね」

よかった声に出さなくて。

それにしてもほんとどうしようかな。

く　なのは　s i d e　o u t　く

く　アルトリア　s i d e　く

やあ、俺はアーサー転生者だ。

神に面白そうだからという理由で殺された。

後悔はしていない。俺は転生前はブサイクって言われていた。

だが心は違つそう説明しても誰も信じてはくれなかった。

小学生の護衛をしていたというのにどうして通報されなければなら
ないというのだ。

俺は騎士だぞ。

神のおかげで俺は神になった。

情報によると神のライバルの神がこの世界に転生者を送つたという。
それで俺にも力を与えたというわけだ。

魔力はE×ランク保持者でもってデバイスももらった。

そして投影魔術これは最強だ。

神は転生者に与える能力は3つまでというから、ニコポ、ナデポも
なんとかしてもらつた。

ヒロインは全員俺の嫁だぜ。

私立聖祥大学付属小学校に転入という形でやってきた。

イギリス生まれということ。デバイスを使えばさも俺が英語を言っ
ているように見える。

俺のデバイス『ロン』正式名称『アヴァロン』は神特製の高性能だ。
転入してすぐほかの転生者を見つけた。

原作にいないやつを探せばいいから簡単だったな。

男が2人に女が2人。女のほうはかなりの美少女だ。

こいつらもおとすか。

にしてもたいしたことないな幸也つてやつは魔力をぶつけてやると
毎回反応するが

蓮つてやつは無表情だたいしたことないな、殺気をぶつけても無表
情だ。

こいつらはなのはトリオとかなり仲がいい部類だ。

昨日はユーノの声が聞こえたから今日が原作の日だ。

これでなのは助けてフェイトをなくさめ・・・

女転生者もかなりの美少女だから俺のハーレムに加えてやるか。

幸也も蓮も原作に関わってくるだろうから。
どっちが各上かはつきりさせてやる。

＼ アルトリア side out 〉

＼ 優奈 side 〉

今日は原作の曰らしいみんな怪我がないといいな。

蓮がバックアップするっていうから大丈夫か。

蓮ってああ見えて面倒見がいいから、幸也を幸せにするために頑張るんだろうな。

私たちが死んでしまったことをまだ自分のせいだと思っていたりするみたいだから。

気にしてないのになあ。

それにしてもアルトリア？だったっけ彼はよく私を見てくる。

特に胸、それから足。これでも一応小学生のからだなんだよ。

ロリコンなのかな？でも今は彼も子供の体だからいいのかな？

葵もよく見られてるって言ってたっけ。

むむ、要注意人物なのか。

蓮はあんな雑種気にするなって言ってたかな。

放課後になった。

私は葵となのはちゃん達と一緒に帰る。

蓮と幸也は先に帰ってしまった。

女の子5人だけで家に帰すだなんて男としてどうかな。

でも後ろのほうでアルトリアが後をつけるようにして歩いている。ちよつと視線が怖い。あの眼は前世で変質者に追われた時以来だ。

「大丈夫？」

葵が心配してくれる。

「大丈夫だよ」

笑顔で返す。

なのはちゃん達は気づいてないみたいだ。

あの時は葵と一緒に帰ってたんだっけ。

すごく怖かった。

蓮と幸也がすごく怒ってた。

蓮はかなりケン力が強い他校の高校を壊滅させたというつわさもあつた。

幸也もそれなりの強さだったんだよね。

あの時は変質者のせいですごく怖かったけど、蓮と幸也が合流した時は、

ちよつとだけほんのちよつとだけ同情した。

蓮が離れてしばらくしてから野太い断末魔のような声が聞こえた。

警察にかなり怒られてたなあ、やりすぎだつて。

今の状況を蓮に連絡したら、彼はひどい目に合わせられるのだろうか？

やめておこう彼はかなり女子に人気があるみたいだから。

「この道を行くと塾に近道なんだ」

「え、そうなの？」

アリスちゃんがちよつと暗めの道を進める。

散歩とかしたら気持ちいいんだろっな。

しばらく進むとなのはちゃんが立ち止った。

「なのはちゃんどうかしたの？」

「今何か聞こえなかった？」

わたしには何も聞こえなかった。

ああ、あれか。確かユーノ君の声が聞こえるってやつか。

私も葵も普段は蓮の造った

魔道具『幻想殺し《イマジンブレイカー》』というネックレスをか
けている。

これのおかげで念話が聞こえないんだろう。

幸也はつけていないがたまにアルトリアが幸也に魔力をぶつけてい
るらしいが、

私たちは一切うけていない。

「何か？」

「うん、声みたいな」

「別に聞こえないよ」

私も白を切る別に嘘はついてないよだって聞こえなかったもん。

「空耳なんじゃないの？」

するとなのはは走り出した

「なのは？」

「なのはちゃん？」

しばらくなのはちゃんが走ってから追いつくと
なのはちゃんがフェレットを抱えていた。

「怪我してるのね、早く病院に行かなきゃ」

「獣医さんだよ」

すぐに近くの動物病院までやってきた。

院長先生は衰弱してるって教えてくれた。けっこう怪我してたもん
ね。

あ、なのはちゃんの手をなめた。

けどまた、眠ってしまつたみたいだ

ユーノ君はなのはちゃんが気につてくれたみたいだ。

なのはちゃんを狙ってる人が結構いるからこれを知ったらユーノ君
はきつと火あぶりだ。

なのはちゃん達が塾だからここでお別れだね。

「ユーノ君って私たちの家で飼うことはできないの？」

あんた何言ってるの？みたいな目で見られた。

「あんたんごめんなさい。最後まで言わないで」・・・そ」

まあ原作ブレイクしすぎになるよね。

下手したらなのはちゃんが魔法に関わりがなくなっちゃっもんね。

「なんにしても今日が運命の日だよ」

葵・・・かつこいい。

） 優奈 side out ）

） なのは side ）

寝る前になって変な感覚が襲った

『聞こえますか？僕の声が聞こえますか？』

昼間の、そして夢の中の声

『この声が聞こえるあなた。僕に力を貸してください。』

空耳？いや違う。気になる。

私は動物病院に向かった。

あのフェレットが病院から出てきた
変な動物がフェレットを追ってる。

そして私は逃げている。

フェレットがしゃべったのには驚いたが、そんな場合じゃない。
このフェレットは私に資質があるって。

魔法の力を貸してほしいって

フェレットは持っていた宝石を私に渡した。

「それを手に、目を閉じて、心を澄ませて、僕の言つとおりに繰り返して」

そしていうとおりに呪文を唱える。

「我、使命を受けし者なり」「我、使命を受けし者なり」「契約のもと、その力を解き放て」「契約のもと、その力を解き放て」「風は空に、星は天に」「風は空に、星は天に」「そして不屈の心は」「そして不屈の心は」「この胸に。この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ!」「」

《スタンバイレディ》

＼ なのは side out 〵

＼ 幸也 side 〵

なのはがセットアップした。

さて出番かな。

それにしてもあの野郎《アルトリア》来なかったな。
フェイト側に着くつもりか？

そんなことより今は目の前のことだ。

「なのは!」

「ふえ？幸也君？どうしてここに」

「民間人か？しまった結界が」

ユーノのやつは俺のこと民間人と思ってやがるな？

「幸也くん！逃げて」

化物は好機と見たのか俺のほうに向かってきた。

「安心しろなのは。俺は、大丈夫だ！」

行くぜ。初めての実戦だ。ラルフ頼むぜ。

「ランドルフ！！セツート、アープ」

《オケーマスター》

バリアジャケットを纏う。

「この世界にも魔導師が？（しかもこの魔力量この子以上!?!）」

「なのは俺は封印ができない、だから封印を頼む。」

「え、え？ええええええ!?!ねえ封印ってどうやるの?。」

「心の中に呪文が浮かびます」

時間稼ぎだが倒すつもりで

「らああ」

強いな原作よりずっと強いこの世界に転生者が現れたことによって
かわってしまったてのか？
だが、

「俺のほうが万倍強ええええ!!」

なのはの方も準備ができたみたいだな

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル???封印」

ふう終わったな。

さて、どう説明しよう。

「幸也 side out」

「アルトリア side」

よし。なのはを助けに行くか。

セットアップもしてある

「待ってるよ。なのは」

「そういつわけにはいかない」

「誰だ!?!」

そいつは俺を見下すように空中に立っていた。

そいつは真っ赤な髪にバイザーで顔を隠している。背は170ほどある。

「テメー何もんだ。転生者か!?!」

「ん?転生者?何を言っているの?私はマスターの命によりあなたを足止めさせていただきます。」

転生者じゃないだと。

「どけよ。最強の俺様が相手をするとか怪我じゃすまないかもだぜ」

「『シヤナ』セットアップ」

返答は武装の準備だった。

「行くぜ」

先手必勝

「『ブリッツアクション』!!」

フェイトが使う魔法の1つ相手の後ろをとる。

「もらった。」

全力で振りぬく。

・・・が、むなしく空を切る。

「な!？」

「見え見えですね」

後ろだと!？

「『断罪・一閃』!」

俺の覚えているのはここまでだ。

〈アルトリア side out〉

〈????? side〉

(マスター終わりました)

(ああ、見ていたよ。さすがだね。

まだまだ技の切れがいまいちだがそれは訓練でどうにでもなるだろう)

(このようなもの『妹』でも何とかあったのではないのですか?)

(ん?彼女はまだ調整中だよ。それに苦戦するかもしれないからね)
相手は苦笑いをしているのだろう。

生まれて間もない彼女でもマスターのことだ少しくらいわかる。

(つまらなかったかもしれないが、我慢してくれ。

今度会ったときはもっと強くなっているかもしれないだろ)

そう・・だなまだ子どもだったからかあの魔力量十分な素質がある。

(あちらも終わったみたいだ。戻ってきていいよ)

(はい。マスター蓮)

〈????? side out〉

第6話 〱原作開始〱（後書き）

彼女の設定は後程明かします。

シグナムと戦わせたらのしそつですね。

第7話 〽原作開始のその夜〽（前書き）

今日は昨日みたくどんどん更新ができませんが、
もう1話ぐらい更新するつもりです。

誤字・脱字があれば報告お願いします。
感想もあると嬉しいです。

第7話 　　～原作開始のその夜～

　　～ 幸也 side ～

1つ目のジュエルシードを封印し終えて公園に来た。

「幸也君は魔法使いだったの？」

「ああ。まあ、ほかのことはこいつが目覚めてからな」

そう言つてユーノに目をやる。

ユーノはジュエルシードを封印した安心感がまた眠ってしまった。そろそろか起きるか？

「・・・すみません」

「あ、起こしちゃった？怪我、痛くない？」

「あ、怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

ユーノはまかれていた包帯をほどいた。

「ほんとだ。怪我の跡がほとんど消えてる」

「助けてくれたおかげで残った魔力を治療に回せました」

「治療魔法か？便利だな」

「あなたは？」

「俺は井口幸也。魔導師だ」

「この世界には魔法技術はないはずですが」

「赤ん坊のころからこいつを持ってたんだと」

そう言ってブレスレットを見せる。

蓮のくれたデバイスはブレスレット型

「それより自己紹介しないのか？まだ名乗ってもらってないんだけど？」

「すみません、僕はユーノ・スクライア」

「私は高町なのは、仲良しの友達や家族はなのはって呼ぶよ」

「さてユーノ、あれはいつたい何なんだ？」

知ってはいるがやっぱり知らないふりをする。

「あれはロストロギア『ジュエルシード』僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にしたものの願いをかなえる魔法の石んだけど、力の発現が不安定でさっきみたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加えることもあるし、たまたま拾ってしまった人や動物が間違っ使用してしまっ」

「さっきのは何かの動物が何かの願いを叶えようとしたが、間違っ暴走したと」

「はい」

「にしてもロストロギアかあ、どうしてそんなもんが地球にあるんだ？」

「それは・・・僕のせいなんだ」

ユーノは言い淀んでしまう。

「僕のは故郷で遺跡発掘を仕事をしているんだ。そしてある日古い遺跡からあれを見つけてしまった。

調査団に依頼して保管してもらったんだけど、運んでいた時空間船が事故か何らかの人為的災害にあって

21個のジュエルシードこの地球、海鳴市周辺に落ちてしまったんだ」

「何個見つけたの？」

確か原作だと2つだったよな

「まだ1つなんだ、油断しちゃってさっきのやつにやられてそしたらなのはさんに助けてもらったというわけなんです」

「あと20個か先は長いね」

「1個？俺たちが現れたことで世界が変わっちゃったのか？ユーノがなのはの方に向いて

「それで・・・巻き込んでしまつてごめんなさい」

「別にユーノ君のせいじゃないんじゃないの？事故が悪いんじゃない？」

「それでも発掘した僕に責任がありますから」

「真面目なんだなユーノは」

「これからは僕がんばります。あと5日ほどで魔力も回復しますしもう迷惑はかけられません」それはだめだよ「え？」

「だってもう知り合っちゃったし、話も聞いちゃったもの」

「俺も放っておけないな、危険なものなんだろう？」

なのはがこんなところでやめるはずはないだろう。

「それに1個でこれなら何か月掛かるんだ？今日のことをなかったことにして

これから過ごすなんてなのはにはできそうもないからな」

ひどいよ。となのはは言うが

「そんな、でも危険ですよ」

「お家の周辺でこんなことがある気になっちゃっし、それに周りの人のにも迷惑になっちゃっしよ？」

「手伝わせるよユーノ」

「お手伝いさせて？私頑張るから」

「うん・・・ありがとう」

「幸也君が魔法使いだっただなんて」

「ごめんな黙ってて、男は秘密があった方がカッコいいって蓮も言ってたからな」

「蓮君も魔法使いなの？」

「いや、心構えかな。あいつ芸達者だから。それに俺誰にも魔法使いだなんて教えてないし」

蓮たちのことは教えない方がいいだろう。

アルトリアは・・・どうするかな？

今日は来なかったし、フェイトの側に着くつもりなのか？

そしたら全力で戦えそうだな。

あ、

「そうだなのはこんな時間だけど帰らなくていいのか」

絶望した顔してるな

「は、早く帰らなきゃ。ユーノ君はうちに来る？まだ教えて惜しいことがあるし」

「はいお願いします。でもいいんですかなんだったら幸也さんの」
幸也でいいぞ」

幸也の家のほうがいいのでは」

家が・・・蓮たちがばれると厄介だな。

「家は・・・駄目だな。1人めちやくちや感のいい奴がいるからばれるぞ」

ユーノはまさかって顔をしてる？動物顔だからよくわからないが。蓮の直感は最高クラスだ目をつむってドッチボールの球をよける。なのはも思うところがあるようだ。

「う、うん。蓮君ならばれちゃうかも」

そんなになんですか？ユーノは驚くが無理もない。追い打ちをかけるか。

「それにあいつはいろんな実験が大好きだからな。ぼろを出したら解剖されるかも」

「わかりましたなのはさんの家に行きます」

よし

「それじゃあ明日からジュエルシードを探しに行くぞ」

今日はこれで別れた

家に帰るとみんなに相談した。

「原作と少し変わってるっぽい」

葵は原作を知っている。

これで原作の知識はあまり必要なくなった。

「アルトリアは？どっちに着くの？」

「さあな、今日は出てこなかった。ってことはフェイト側かもな」

蓮が足止めしてくれてたのかも。

正体ばらしてないだろうな・・・ないか今まで以上の嫌がらせなんていやだもんな。どうでもいいんだらうけど。

「蓮は？」

「研究室に閉じこもってるよ」

あいつは最近何面白いこと見つけたのか知らないが
こそこそと準備してるみたいだな？

「明日は神社なのかな？」

「もしかしたら違うかもしれないが、ある程度は同じじゃないか？」

犬じゃなくて猫とか、それはさすがの家か。

「なににせよ始まりだ」

） 幸也 side out ）

） アルトリア side ）

気が付くと公園だった。

「俺は確か・・・」

そうあの赤髪の女にやられて・・・

うそだ！オリ主であるはずの俺が負けるだなんて

・・・そうだ・・・何か汚い手を使ったんだ

短距離転移とか・・・次は負けねえ。

勝って俺のものにしてやる。

なのはを助けられはしなかったがフェイトに協力するのもいいな。

あの純粋な子はコロツと落ちるだろう。

待てるよ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ

〈 アルトリア side out 〉

〈 ???? side 〉

（それでマスターあの男を監視していればいいのですね？）

私はマスターと連絡を取る

（そうだね、そして件のロストロギアが暴走した時に邪魔してくれてかまわない）

あんまり近づきたくはないのだが、これも命令だ。

（何かあったら『妹』のバックアップも付けるよ）

そうか調整が終わったのか、私の『家族』

(一応君の家はここなんだから戻ってきてね、あとデバイスに何かあれば)

(はい、すぐに戻ります)

(よしよし、今度近いうちに戻ってくるよつづつからその時は戻ってきてね。

暇なときは自由にしていいからさ)

(はい、交信終了します)

〉 ???? side out 〉

〉 蓮 side 〉

現在俺は能力を使ってデバイスを作っている。

葵と優奈の分だ。

幸也のはブレスレットにしたし、ネックレスだと『幻想殺し』とかぶるからなあ。

「となると、指輪かイヤリングか」

あ、髪飾りってのもいいな。

「ならさっそく」

アイに材料を持ってきてもらい製作を開始する。

2日かな？俺たちが襲われるとしたら、A・S編が狙われるって言うってたな。

「アイ。現実世界は今何時だ？」

《現在1時です》

1時かなら戻って寝るかな。

いや、学校で寝ればいいのか？

おっと優等生キャラを貫き通さねば。

「じゃあもう戻るから、そのままにしておいて」

とりあえずアルトリアの行動が楽しみだな？

「ちょっと待ってください！」

後ろを振り向く。

そこにいたのは緑色っぽい髪の小柄な子

目の色は翡翠色、きれいな緑だ

白のワンピースを着ている。

「どうした？リーシエ」

目の前の子リーシエは怒っているようだ。

プンスカ、プンスカ擬音語が聞こえてくる。

見てて和むな。

「お姉さまはどうしているのですか？まだ会っていないのですよ」

そのことかやっぱこの子もバックアップに回すか？

「君はまだ生まれたばかりだろう？もう少し待ってくれないか」

せめてこの世界の常識を身に付けてからにしてほしい。

「豚野郎の監視なんかにお姉さまを使うだなんて、何様のつもりですか？」

とにかく口が悪い、何をミスったのだろう。

普通の子にするはずだったのに。

今更性格の変更なんて俺がまるでマッドサイエンティストみたいじゃないか。

「なににせよ、もう少しで戻ってくるように言っておいたから」

はあ、こんな調子で大丈夫なのかな？

この子リリースしか見てないからなあ。

） 蓮 side out ）

第8話 くなのは、一人で戦う（前書き）

どうも読んでいただき、感謝感激です。

弟がスゲーじゃんって言ってくれますがまだまだですよ。

毎日更新指しますがなにぶん体は高校生中身はお子ちゃますごく眠いです。

アルトリアの名前にご指摘いただきました。

アルトリウスが男の名前だそうです。

ま、いいよね。この方が面白そうだし。

第8話 くなのは、一人で戦う

蓮 side out

眠い。結果的にリーシェに付き合わされて1時間しか寝れなかった。その上葵がなぜか怖い。知らない女の子の匂いがする。なんて言ってきた。お前は犬か。

突っ込んだらぼろが出そうだったから何も言わない。

葵はずっと睨んでくる。優等生を捨ててまで寝ようと思ったが無理だった。

葵の殺気は恐ろしい。家に帰ってすぐに寝よう。そう決心するほどだ。

昼休みに入って幸也がアルトリアに呼び出された。

昨日のことを聞くつもりなんだろう。

リリースに負け、邪魔することを糾弾でもするつもりか？

幸也は何も知らないのに。

ま、一応俺も行っておきますか。

蓮 side out

幸也 side

アルトリアの馬鹿に呼び出された。

宣戦布告か？まあ別に負けないけどな。

体育館裏のどこの窓からも見えない死角に連れてこられる。

この学校不良とかいないのか。

THE・溜まり場って空気出てんだけど。

「おい、昨日の邪魔はてめえの仲間か？」

邪魔があつたのか？

「さあな。俺はなんも知らないぜ」

「まあいい。あの女も倒して俺のもんにしてやるしな」

女？葵か優奈が出てきたのか？

あいつらの能力は戦闘用じゃないはずなのに。

「どうした？なのは俺のもんにするんだ。モブは引っ込んでな」

「モブってお前オリ主にでもなつたてのかよ？」

どんな能力をもらつたんだ？

「俺はオリ主だ。テメーはここで痛い目に遭いな」

そういつてやつは手に剣を出す・・・投影・・・か？

「ん？どうした？俺の投影魔法を見てビビつたのか」

あれは『干将・莫耶』てことは・・・かぶつた？
いいのか？それでいいのか？

そう思いつつ俺も干将・莫耶を投影する。

「何！？ちょ、おま、パクってんじゃねえぞ！！」

「お前も投影が能力とはな、完全にかぶったぞ」

一触即発の空気だな。あいつは自分のことオリ主とってるから絶対攻撃してくるつもりだろ。

「何してるんだ？」

蓮がやってきた。

（蓮、こいつ俺と同じ能力だった下がってる）

（そうか、幸也。俺は魔法の存在を知らないモブキャラってことにしておけ

俺たちはお前つながりでなのは達と友達だっとな）

（わかった）

「蓮！危ないぞ下がってる」

「こいつも転生者だろ？ならここで消してやる」

（何言ってるやがる！こいつは一般人だ！）

（何！？お前の仲間だろ）

（普通の友達ができるって考えられねえのか？）

「だが、見られたんだ。ここで消す」

「記憶を消す。それでいいだろ？」

蓮は何が何やらといった表情をしている。
さすがだな役者になれるぜ。

「わかった。さっきの続きは放課後だ」

逃げんじゃねえぞ。と捨て台詞を残して去っていく。

「まさか転生者とわかれば殺すつもりとはね」

蓮が呆れている。俺もかなり驚いた、デバイスがあるとはいえ、特殊能力はないようなものだ。
バリアジャケットの展開が遅くなれば死に繋がる。

「にしても昨夜はなにを「ストップ」・・・なんだ？」

「その説明は今日の夜な。説明長くなるかもしれないし、なのはの手伝いするんだろ」

放課後はなのはの手伝いをするのだが
かなり気になるぞ。

「そんな顔すんな、夜に説明するからよ」

「ああ、分かった」

あ、チャイム鳴っちまった。
弁当まだ食ってないぞ。

放課後はなのはと・・・その前にアルトリアの野郎とさっきの続きか

「アルトリアの方は任せる。お前の所に行かせないようにしてやる」

「なのはにもばらさないのか？」

「ああ、時が来ればな」

いやおうなくばれるだろ？そう付け加える。

「さて、教室にもどるか」

腹減ったな。あいつのせいでまだ食ってないしな。
俺たちは教室に戻っていた。

〈 幸也 side out 〉

〈 アルトリア side 〉

昼休みにパクリと話してからモブに魔力をぶつけているが何の反応もない。

本当に記憶を消したみたいだ。でなけりゃこんなに平然としているはずがねえ。

なのはも驚いた顔でこっちを見ていたので、笑顔でかえす。

途端に目をそらされた。恥ずかしがっちゃってさすが俺の嫁だな。

放課後はパクリをのしてなのはにどっちが守るにふさわしいか見せてやる。

フェイトのことも考えとかないな傷を一瞬で癒す宝具とかあったはずだ。

これを使えばプレシアも治せるし。

放課後になって幸也の後を追う。

あいつなのはと一緒に帰るつもりか。

「幸也を借りていいか？」

なのはに尋ねる。

なのはも俺が魔導師だつてことに気が付いただろうしな。幸也の方をちらっと見てから。

「う、うん。いいよ。私もついて行っていいよね？」

ふふ。力の差を見せてやるぜ。

そして強い俺になのははメロメロ。完璧だ。

(どうして魔法が使えるか聞いておかなきゃ)

神社の方へいく。原作だと次はここかな？

頂上までの階段を上がると街が一望できる。

ん？あれは？俺は視力が強化できるからよく見える。

あのバイザー。あの女だ。まっすぐにこっちを見てる。

「ごめんなのはちょっと用事を思い出した」

「え？」

「ちょっとここで待っていてくれ」

なのはをこんな奴と2人きりにするのは忍びないが、あいつをささっとつぶせば済むだけだ。

「ロン、セットアップ」

《オーライマスター、セットアップ》

バリアジャケットを身に纏う。イメージはセイバーの騎士甲冑。

「行くぜ、待ってるよ!」

《アクセルフィン!》

一気に加速してあの女を倒しに行く
すぐ終わらせてやる。

＼ アルトリア side out 〉

＼ 幸也 side 〉

あの野郎が何か見つけたのか俺となのはをおいてどこかに向かっている。

視力が強化されているから奴の行先を見ると赤い髪の女性がいた。
あれが蓮の対策か? 変身魔法かなにかか?

「行っちゃったね」

なのはは呆れているような。

俺でもわかる好感度が絶対下がったな。

呼び出しておいてこんな階段を上らせたあげく自分は飛行魔法でどっかに行く。

あ、でもなのははついて行くって言ったのか。

俺は、まあいいか原作ならここが2つ目だ。

「あ、ユーノくん！」

ユーノのやつがやってきた。

「あ、なのは、幸也いま空を飛んで行ったのって？」

「新しい魔導師だよ。アルトリアくんっていうの」

「魔導師ですか？2人もいるなんて」

「ユーノなんているんだ？」

疑問だまだジュエルシードは見つかっていないのに

「ああ、それならなのはが魔導師がいるっていうから一度見ておこうかと」

そうだな・・・ん？

「ジュエルシードが発動した？」

「この奥です」

奥に犬のような化物がいた。
怖！？そうだ

「なのは！今回はお前がやってみろ」

「え！？手伝ってくれないの？」

手伝いたいんだけどよ。

「なのははこれからも魔法を使っていくだろ？
そしたらここいらでレベルアップだ。本当に危なくなったら俺が助けに入る」

俺が手伝いすぎると将来に管理局のエースのポジションが揺らいじまうかもしれないしな。

「ユーノ結界だ！」

「うん」

「なのは大丈夫だ。俺はお前を絶対に守る必ずだ」

笑顔で安心させようとする

「／／／う、うん」

成功はしたようだ。

（あの笑顔いいなあ。よしがんばるぞー！！）

「あつちでも結界が張られているみたいだけど」

アルトリアの奴案外強くないのか？

いや、蓮が規格外なだけか。

あいつのトラップは完全に抜け出したと思ってても止めがくるからな。チートをもらっても苦戦はするか。

） 幸也 side out ）

） なのは side ）

幸也君に言われて怪物と向き合っ

「レイジングハート！セートアップ！」

幸也君がこれだけでもいいと言うから言ってみただけ、
服装に変化がない

「あれ？服装変わってないよ」

あわててレイジングハートに尋ねる。

《イメージしてくださいそうすれば大丈夫です》

イメージか・・・よし

《いきますよ。バリアジャケット》

私の体は光に包まれて、昨日と同じように服装が変わる。

「これで大丈夫だね。次はどうすればいいのかな？」

と言ってる間に怪物が突撃してきた。

「え、ちよつと・・・まっ」

《プロテクション！》

「グオオオオオオ!!」

雄たけびをあげて怪物がはじかれていく

「あ……れ？」

「一撃？」

幸也君がすごく驚いた顔をしてる。

「はっ、なのは!今のうちに封印を」

そうだ封印しなきゃ。

「レイジングハートお願い。リリカルマジカル!ジュエルシールドシリアル???封印!」

ジュエルシールドは封印されて怪物は子犬に戻った。

「お疲れ。俺いらなかったじゃん」

「でもまだまだだよ。ユーノ君、幸也君もつといるいるなこと教えて」

「う、うん(僕が教えることあるかな?)」

「あんまり教えるの得意じゃないんだけど」

よし、これからもがんばるぞ。

＼ なのは side out 〉

＼ アルトリア side 〉

あいつを見つけて結界を張るとなのはの方も結界が張られたみたいだ。

くそ間に合わなかったみたいだ。
とりあえず。

「トリースオン
同調開始！！」
『ガルドボルグ？
偽・螺旋剣』

弓を投影して打ち込む。

あたる直前に指を鳴らして。

「ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

大爆発で一気に吹き飛ばす。

「終わったな」

これを喰らって生きてた奴はいねえ。

バーサーカーにでもなるんだな。

「やっちまったか？もったいねえことしちゃったな」

いい体だったのに。

「残念ながらはずれです」

そいつは上にいた。

馬鹿なやつぱり転移使えんのか魔法陣が出てなかったのに。

「てめえ」

「いきなりなんですか？見かけたら攻撃するのですか？」

「昨日の借りを返しに来たんだよ」

女はため息を吐く

「先に仕掛けたのはそちらですよ？あの時私はデバイスを準備した
だけなのですから」

よく見るとデバイスは刀型『レヴァンティン』に似ているがこっちは黒が主体だ。

「てめえ誰が命令してやがる。幸也か？」

「彼ではございません」

幸也じゃない？

じゃあ誰がやつ以外に転生者はいねえはずだ。

「さて、あちらはもう終わるようですね」

な、もうおわるのか？

俺また出遅れた？こいつはなのはを手伝おうとする俺の邪魔をしにかたってのか？

ふざけやがって。

「これで終わらせてやる」

「I am the bone of my s

「そんな時間を与えると思っ

な、ふつう詠唱が終わるまで待つだろう。
いない？どこへ？

「終わりです『断罪・一閃』」

目の前に現れた炎に俺は焼かれ切られた。

「アルトリア side out」

「リリース side」

（ご苦労様、リリース）

マスターからの通信が入る。

こんな小物放置していてもいいのでは？

（いえ、マスター。話になりません。詠唱の途中に襲われると考えないのでしょうか？）

（彼は単純なんだよ。大技はそれだけ放つのに隙ができるというのがわかってはいないんだ）

最後の詠唱は切り札だったのだろうあれを私に放つには不意打ちで

行っしかない。
無駄でしょうけどね。

(リーシェが会いたがってる。一回戻ってきてくれないか？幸也に、みんなにも紹介したい)

(そうですか。わかりました。でも監視はいいのですか？幸也に説明するよ。)

脅威度はかなり低いから安心してってね)

そうですか。マスターのご友人が怪我をされるのは困りますし。

(デバイスの様子も見せてね)

(はい)

私は横に転がっているアルトリアを見て思う

(真面目に訓練すればいいのに)

彼は慢心している。力を扱い切れていない。

(これでは今までの監視は杞憂になりそうですね)

＼ リリス side out 〵

＼ 幸也 side 〵

「来ないね」

なのははそうつぶやいた。
返り討ちにあったのか？
ならもう待つ必要もないな

「なのは。もう帰るか」

ジュエルシードを封印してもう1時間は経つもう待たなくてもいい
だろう

「けど・・・」

「また明日聞けばいいさ」

もう夕方だしな。と付け加える

「なのはといっぱいお話しできて退屈はしなかったしな」

「／／／あ、ありがとう」

「あ、そうだ翠屋によっていいだろう？お土産でもかっていこうか
なって」

「いいに決まってるよ」

俺となのは、ユーノは翠屋に向かって帰って行った

） 幸也 side out ）

第8話 くなのは、一人で戦う (後書き)

???は結果リリースです

今度キャラ紹介出しますね。

次回も読んでいただけると嬉しいです

では

第9話 く報告く(前書き)

誤字・脱字があれば言ってください。

なるべくすぐ直します。

第9話 報告

蓮 side

その日の夜。みんなを研究室に呼ぶ。

幸也も戻ってきたし、しかもケーキまである。気の利くやつだ。俺はみんなを見渡して1つ咳払い。

「コホン、では俺が裏方としてやったことを報告しようかな」

「たのむぜ」

「まずは二人を紹介しよう。入っただい」

扉があいて二人が入ってくる。リリースとリーシェだ。

「紹介する。リリースとリーシェだ」

お互いに挨拶を済ます。

「この子たちどうしたの？」

葵が聞いてくる。頼むから目の色を消さないでくれ。

「どうしたってどうか・・・造った」

な、と驚いてくれる。その顔が見たかったんだよ。

「優奈はわからないかもしれないが彼女たちはデバイスだ」

その言葉に幸也も葵もわかったようだ。

「・・・ユニゾンデバイスか」

「その通り。俺と優奈の分な」

「私にはないの？」

「リリースは攻撃特化型でリーシエは補助・防御特化型。

幸也には必要ないようだし、葵は防御が得意だろ？」

俺は火力が弱いし、優奈は回復系だから防御面が欲しいかったんだ」

この説明にまあ納得してもらおう。

十分だろう。

リーシエが近づいてくる。

「私のマスターはあの子なの？」

優奈の方を見る

「ああ、頼むぞ」

わかった。と優奈の方に向かっていく

「私の名前はリーシエ。マスターよろしくね」

「えっと・・・私は優奈。よろしくだねリーシエちゃん」

葵と優奈に渡しておかないと。

「まず葵。これデバイスな」

指輪を渡す。おお、驚いてる驚いてる。

「指輪？け、結婚？」

ん？最後の方聞き取れなかったけど。

「そう指輪型デバイス・・・おい聞いているか？」

指輪・・・指輪。と、つぶやいてるが

「あ、葵のことは置いといて私にもあるの？」

「おう、優奈の分はこれな」

髪飾りを渡す

「わあ、かわいい髪飾り」

「ちょっと幸也と話があるから。リリースとリーシェに起動方法とその他もろもろおしえてもらって。頼むぞリリース」

「了解しました、マスター」

(リリースとリーシェは俺たちが転生者ということを知らないからな
言わないでおけよ)

念話で言うておく。

（（わかった））

葵達は訓練室に行っただろう。

扉から出ていった。

「蓮、俺だけ残ったってことは葵達にも秘密なのか？」

幸也が聞いてくる。あれ、ちょっと拗ねてる？

「いや別に。念話の通りややこしくなるからリリース達には聞かれないだけだ」

説明しにくいもん。

転生者なんだ。って言うてもリリースなら『病院に行きますか？』というだろう。

リーシェなら罵倒され俺のLPは0にされるのがおちだ。俺は断じてMではない。

「お前、ユニゾンデバイスもらえなかったこと拗ねてんのか？」

「ち、違えよ。別に拗ねてなんかねえし、デバイスもカートリッジついてないこと、

聞きたいとも思っただけよ」

カートリッジのことも聞いておきたかったのか。

「無印でカートリッジはまずいと思ったんだけどな。」

ちなみに通常時の状態で『モード、A・S』って叫ぶとカートリッジシステムにシステムがアップグレードされるぞ、その上破損状態がかなりやばくても、移行することで自動高速修復される。ちなみにもとにはカートリッジシステムを取り除かないと今の状態には戻らない」

「そ、そうだったのか。蓮だもんなどことん期待は裏切らない」

ふ、言ってくれぬぜ。

おだてたってユニゾンデバイスはやらんぞ

「それでユニゾンデバイスはお前には必要ないだろうと思ったからだ。

攻撃面は言わずもなだが、防御面でも何とかできるだろう？」

そのための高機動よりのデバイスなんだから」

「高機動用だと？」

そうお前のデバイスは高機動が向いている。

フェイトみたいに装甲が薄くなるがな。

「わかった。さすがだな」

「それで今までのアルトリアをリリースを使って監視したりちよっかいかけてきたわけなんだけど」

まだ2回しかちよっかいかけてないが。

「ああ、あいつ『俺のものにしてやる』とか狙ってたぞ」

それであいつに見られると鳥肌が立つようですとか言ってたが、まさか発情していたとは。

さすがに引くな。

「そ、そうか。それでだなりリスとも話したんだがあいつにちょっかいをかけるのをやめようと思う」

「?どうしてだ」

「2度ほどリリースと戦ったんだが、能力に過信しすぎてるし、自分がこの世界最強とか思ってるんだろうな慢心しすぎ。ぶっちゃけお前の敵にはなりえない。」

真面目に修行すれば、良いとこまでいけるんだろうけどな」

それでも足りない。と付け加えておく。

「そうか、フェイトの方はどうする?」

フェイトの方は考えがあるが、如何せんプレシアの位置がわからない。

「管理局が出てくる前にプレシアと会っておきたいんだが」

そうすればプレシアを助けたとしてもつかまえることはないだろう。

「リリースをフェイトの方に近づけようと思う」

「どれだけ強いんだ?」

「お前が投影を使わなければ、惜しいとこまで行って負けるかもな」
まだ実戦テストしたわけじゃないし。

アルトリアじゃテストにもならなかったし俺が直々に戦うというのもテストにならない。

「フェイトと戦った時には気をつけるよ」

強敵だしな。

「俺が直々に戦うっていうのもな。なのはの成長に影響出るだろうから」

幸也はなのはを育てるようだ。源氏物語じゃないよ。魔法のだよ。

「それでジュエルシード何個か手土産にプレセアに接触するから原作軽く壊れるかも」

「構わねえよもう少し壊れてるんだ。ユーノが1個目で苦戦したみたいだからな」

・・・ああ、それ・・・は。

「悪い、1個持ってるんだわこれが」

ジュエルシードを見せる

幸也がぎよっとしてる。

俺が原作ブレイクしちまったよ。

「もう驚かねえぞ」

幸也は耐えているようだ。
だが無駄だ俺は知識のおかげでここ最近はありとあらゆるものを作っている。
楽しい楽しいぞ。

「あ、2度と驚きたくないんだったら第1ラボには入るなよ」

あそこはもう倉庫になってしまった。
きつと驚くべきものが見れるだろう。
管理局が見たら俺を誘拐してでも技術を手に入れようとするんだろ
うな。
自信過剰じゃないよ。

〈 蓮 side out 〉

〈 葵 side 〉

蓮に指輪をもらってからの記憶がない。
優奈に絶対意味が違うからと諭されたので残念だがいつか必ず。

「葵様、優奈様。よろしいですか？」

あ、リリースが聞いてくる。
ごめんまた意識飛んできた。

「何？あと様はやめてね、友達でしょ？」

はあ、と躊躇っているようだがりーシエはもう敬語やめてるよ？

「リーシエ。優奈様はあなたのマスターなのですよ」

「敬語禁止って言われたもん」

リーシエは素直だね。

「そういえば、デバイスもらったんだからマスター認証するんだっけ？」

優奈がそう言うが髪飾りか指輪は本番のときがよかったなあ。

「こら、葵。飛ばない飛ばない」

いけない、いけないもう気にしないで。

優奈が先に始めるようだ。

「ではマスター認証、黒羽優奈。術式ミッドチルダ式。
あなたの愛称は『ソレイユ』。正式名称『ジャンティソレイユ』セ
ットアップ」

優奈が光に包まれる。

白衣の天使だね。ナース服だ。

「ふふ、バリアジャケットも完璧。次は葵だよ」

私の番か。バリアジャケットはどうしようかな

「マスター認証、日向葵。術式ミッドチルダ式
愛称は『ルナ』。正式名称『ルナリオン』。セットアップ」

私も光に包まれる。黒をイメージした服装。
スカートに肩を出すような恰好、背中には羽衣が浮いている。
手袋におおわれた右手には杖が握られている。

「準備の方はできたようですね。では訓練を始めましょう」

そっかー応魔法の訓練を受けた方がいいんだっけ？

「リーシエは葵さ「葵」・・・葵の方をお願いします」

「はいお姉さま」

リーシエが私の先生かお手柔らかにね。

私たちの本格的な魔法の訓練が始まった。

） 葵 side out ）

） アルトリア side ）

目覚めると公園のベンチに横たわっていた。
なんだまた負けたのか？

「ありえねえだろ」

俺はオリ主だ。負けるはずが・・・そっか真の主人公なら負けて強
くなつていくもんな。

これで俺は次元最強の称号を手に入れるんだ。
なのはには悪いことしちまったな。

あの幸也つてやつと2人つきりにしちまったし。

さぞ不安だっただろう、好きでもない相手と一緒にいるだなんて。まあ明日説明すればいいか。

あの女転生者だなそういえばデバイスの名前を『シヤナ』って言うてたし。

正式名称『警殿遮那』だな。

嘘つきやがって次はほこぼこにしてやるよ

） アルトリア side out ）

第9話 報告（後書き）

愛称は考えるのが難しいです。

気にしないで頂けるとありがたいです。

アルトリアに勝利は訪れるのか？

どうも今日はあと1話くらい更新したいです。

第10話 〈テストロッサ家に突撃〉（前書き）

どうも、友達とカラオケに行こうと思ってメールをしても帰ってきません。

1人は帰ってきたのですが、もう一人が・・・

今日思い出したんです。

あいつ、センター受けるからテスト勉強でしょうね。

僕とメール返してくれた奴AOで合格しちゃったからすっかりわすれてました。

これを読んでいる方にも受験者がいると思いますが、頑張ってください。

勉強しないとまずいですよ。

ちなみに高校の成績はほぼオール3で4がちらほらな成績でした。

第10話 ｝テスタロッサ家に突撃｝

｝ 幸也 side ｝

放課後までアルトリアのやつは大人しかった。帰る間際になって念話で話があると言われた。なのはも一緒に来ている。

アリサやずずかは今日は塾なので先に帰った。公園にてユーノと合流、人払いの結界を張る

「あなたはいつたい何者なんですか？」

ユーノはアルトリアに聞く、昨日は聞きそびれたしな。

「俺はミッドチルダの魔導師だ」

アルトリアのやつの実家はミッドチルダにあるらしい。

『ジークフリート家』 古代ベルカの時代から続くお家でその道では有名ならしい。

「なんでそんなやつがこの町にいるんだよ？」

「母がイギリス生まれなんだ。それで日本に仕事でな。

父は次元航行艦の船長で実家にいても会えないしな。俺はこっちにいるわけだ」

戸籍も偽造されてるのか。

「それで今回の事件を知ってしまったからな。俺にも協力させてく

れ

そういつて笑顔を見せるアルトリア。
なのはにニコポは効いていないようだ。

「いいんですか？」

ユーノは乗り気だ。まあ手伝いが増えればその分早く済むしな。
それ自体はいいんだがこいつが俺のことを快く思っていないのは知っているし。

「ああ、任せてくれ、なのは（かわいいなのは？）」

「う、うん、よろしく。（寒気が）」

「それで何個が見つけたのか？」

こいつが何個か持っているかもしれない。

「・・・」

無視かよ！

「ねえ。何個持ってるの？」

「ごめんなのは。まだ見つけれなくて

なのはには答えるのかよ。

「じゃあ今日も探しに行く」ちょっと待て「・・・なんだ」

いきなり止めやがって。

「あの赤髪の女はお前の仲間じゃないのか？」

リリースのことか？フェイト側に着くらしいからしらないとでも・・・

「違うな。俺の知り合いに赤い髪の女性はいない」

「っち。つかえねえな」

舌打ちのうえ使えない宣言かよ。

自分で調べるんだな。絶対見つかりはしないだろうがな。

そして日曜日になった。今日は巨大な木が出てきて決意を新たにする日だ。

なのはの成長のためには必要なイベントなのだが、アルトリアがそいつを持っていやがった。

だがなのはの決意は固まっていた。違う人が持っていたのをみたのだろう。

もし発動したらと思ってしまったようだ。

俺もなるべくはなのはを傷つけないようにするだがスパルタを目指すつもりだ。

〈 幸也 side out 〉

〈 リリス side 〉

マスターから連絡を受けてジュエルシールドが発動した場所に転移する。

そこには金髪の女の子がいた。情報通りだ。マスターは今回の首謀者の娘が来ているかもしれないから発見次第接触せよ、と言われていた。

あちらはこちらに気づいてはいないようだ。

「よろしいかしら？」

あちらが瞬時にこちらを向いて警戒する。速いね。でも今の実力ならあの男にも勝てるかどうか。

「びつくりさせてしまつてごめんね。あなたのお母様に合わせたい人がいるの」

『母』の部分でぴくつとする。やはりそうなのか？

「管理局の方ですか？」

「違いますよ。私はある方の命により行動していますからとりあえずデバイスを下げてください」

素直に下げてはもらえませんか。

「私には敵対の意はありません。デバイスも・・・ほら待機状態ですよ？」

そういつてデバイスを足元に置く

「これで話を聞いてもらえますか？」

「わかりました、母へのご用件は私が聞きます。何の用ですか？」

「ううん？私の主はあなたのお母様に直接を望んでいるの。
なるべくは今すぐ会いたいです。これで合わせてはいただけませ
んか？」

そう言つて3つのジュエルシードを見せる。

マスターが持っていた1つと私がリーシェが見つけた2つ

「っ！？それを渡してください」

「いいですが、これを渡す代わりにあなたのお母様に合わせていた
だけですか？」

その瞬間後ろから気配が現れる。

「それをよこせええ！！」

オレンジの毛並みをしたオオカミだ。
不意打ちは見事。だが

「遅い」

左によける、その瞬間に金髪の女の子が追撃する。

魔力を手にまとわせて白羽取り。

かなり驚いたようですが。

「交渉は決裂ですか？」

「ごめんなさいそれは必要なものですから」

母親のためですか。

「お母様に合わせていただければこれは渡しますよ？私にも主に必要なものですか」

「奪うからいい！！」

オレンジのオオカミは人になって殴りかかる。
使い魔ですか障壁を張る。

「バリアブレイク！！」

障壁を殴りますか破れませよ。

「ばかな！？」

「単純な実力差の問題です。いい拳でしたよ」

では眠っていただきましたでしょうか。

魔力を開放し炎熱変換された魔力を彼女たちにぶつける。
やけどはしませんよ。周りの酸素を奪うだけです。

「くっ！」

「それではおやすみなさい」

後ろに短距離転移し意識を奪う

「フェイト！？お前えフェイトを離せ！！」

「先に仕掛けたのはそちらでしょうに」

私はこの子、フェイトの使い魔に言う。

「この子は眠っているだけです。あなたはこの子のお母様の所に連れて行ってくれますか？」

主人が人質なら快く教えてくれるだろう。

「いいよ。あんたの主人を連れてきな？」

よしでは早速マスターを呼びますか。

とりあえず私たちはフェイトのマンションへと向かった。

＼ リリス side out 〵

＼ 蓮 side out 〵

リリスから連絡を受けフェイトのマンションに向かう。結界が張ってあるな。リリスが言っていたのはここか。

フードに仮面をかぶるフードには認識障害がかけられており、こちらを調べることが一切できなくなる。

仮面はハサンの骸骨の仮面だ。怪しさ満載だが普通の人間には俺のことが一切認識できない。

「マスターこちらです」

マンションの屋上のに来たならフェイトを抱えた確かアルフにリリス

がいた。

「やあ待たせてすまない」

紳士風にいかないとな。

「こいつがリリースの主かい？」

フェイトをやられたのだろっアルフはかなりご立腹だ。

「リリースがすまなかったね。でも報告によると先に仕掛けたのだろっ？」

アルフはこれ以上は無駄とばかりにフェイトを起こす。

「っん・・・ここは？」

「フェイトごめんね負けちゃって」

「いいよアルフ。あなたが主さんですか？」

「主さんじゃ変だな・・・ゴーストとでも呼んでくれ」

「本当に母さんに会わせたらジュエルシードを渡してくれるんですか？」

「ああ、あちらが何かしない限りこちらは手を出さない。話がしたいんだ」

プレシアにあって話をする。これが目的一度あちらに行けばあとで

何度でも行ける。

「わかりました」

俺たちは『時の庭園』に転移した。

（座標は覚えたか？リリス）

（はい。マスターしかと）

「母さんに説明するからちょっと待ってて」

フェイトが進もうとするが、それを制す」

「いや結構。1人で行こう」

「母さんに何をするつもりですか？」

母を愛しているんだね。大切な気持ちだ。

この子は本当に想っている。

この子の気持ちを踏みにじむのか？プレシア。

「リリスから聞いたと思うがお話だよ」

そういつて進んでいく。

しばらくすると表情のすぐれない女性と会った。

「あなたは？」

「フェイトさんに連れてきてもらいましたよ」

「使えない子ね。ここの場所を教えるなんて」

使えない子だと？彼女はリリスを止めるために戦ったお前とは違う。……落ち着け。彼女は時間がないから焦っている。大丈夫だ。

「あなたもほとんど動けないでしょう？」

ピクッと反応する。

「顔色も優れていないようですね。あまりお時間がないようだ」

返事は紫の魔法。右隣に落ちてくる。

「戯言は終わり。あなたのような子に構っている時間はないのよ？」

「……あなたの夢を叶えてあげますよ」

「………なんですって？」

「あなたの過去を知っています。管理局のサーバーにハッキングして調べさせていただきました」

俺はプレシアを救うために管理局にハッキングしデータを集めた。

「次元航行エネルギー駆動炉ヒュウドラ。あなたが開発に携わった」

この事件で事件の裏をしつた。

幸也や葵はプレシアの上司が無理難題を押し付けられ暴走。

だがこの事件はプレシアに内密に技術者を使い装置を改良という名

でバラし暴走。

アリシアの賠償金を払うと行ってこの件から彼女を表舞台から消し、自分たちはヒュウドラを完成させ、特許を所得。

現在管理局で使われている次元航行艦の7割がヒュウドラをベースにしている。

まだこのことは幸也たちには話していないがこれを知った時にはどうするのだろうか。

なのは達が管理局に入るのをやめさせるだろう。

それも俺たちの道の1つではあるのだが、この件で管理局がどう動くか。

情報によると管理局はもう動き出している。

次元航行艦アースラが地球に向かって発進準備中との情報を得た。

表向きは近くの管理外世界への巡航しかし上層部はジュエルシードの情報を入手しアースラを送った。

「あなたの計画はなんですか？死者蘇生の秘術は見つからないと思うよ？」

「黙りなさい！！あの事件を調べたならわかるでしょう？」

娘が死んだのよ。私の愛しいアリシア。まだ5歳だったのよ？」

「確かに5歳で亡くなったのはかわいそうだし、そうでしょう！！しかし！」

「死者を蘇らせることはその者に対する冒瀆だ。」

「あなたは知らないからそんなことが言えるのよ！アリシアはたった1人、

私を励まして、ヒュウドラを開発した時だって疲れているのにわがままも言わないで」

「今を生きている者をなぜ大切にしない？」

「フェイトのことを言っているの？あの子は失敗作の道具、人間はないわ」

こいつフェイトのことを人形だと？

彼女は人だ。血も通っているし何より感情を持っている。

「大切にしていた時期だつてあつたのだろうか？」

「アリシアではないとわかった時までだね。あの子はアリシアじゃないわ！」

「そうだ！彼女はアリシアの妹だ！」

「いもう・・・と？」

「アリシアは言ったことがないのか妹が欲しいと」

幸也が言っていたアリシアとプレシアの幸せな時間の中で、アリシアが言ったそうだ。

『妹が欲しい』

「フェイトの記憶を少しのぞかせてもらったが、アリシアの記憶が残っていた。

あの子は妹が欲しいって言っていたんじゃないのか？

彼女の願いを尊重はしないのか。愛娘なんだろう！」

涙が出てきた。

あれ、俺が悲しいわけじゃないのに涙ながらの力説か。笑えるな。

「アリシアの・・・願い」

「ああ、あの子の大切な願い。叶えてやらないのか？」

プレシアが泣き崩れる。

「いったいどのくらい経っただろうか。」

「あなたはどうしてアリシアのために泣いてくれるの？」

わかんねえよ

「さあな、しいて言うなら親の愛に泣いたってところが、捨て子だしな」

そう。とプレシアは目を伏せる。

「フェイトそこにいるんでしょ？入ってらっしゃい？」

フェイトとアルフ、リリスが入ってくる。

「母さんさっきの・・・」

「こっちにいらっしゃい」

プレシアが手招きする。その行動にフェイトは戸惑っていたが、リリスに背中を軽く押される。

フェイトがプレシアに近づくと優しく抱きしめた。

「あ……」

「ごめんなさいね、フェイト。私はだめな母親だわ。娘を失ったショックでその妹にその影を求めて、違ったから見捨てようとして。」

あなたは私の娘なのにね。」

「か・あ……さん」

「なあに、フェイト？」

「母さん、母さん、母さん！」

「なあに、フェイト？」

「う、うわーん」

フェイトは泣き出してしまった。隣でアルフが泣いている。

「よかったね、よかったね。フェイト」

そんなアルフにハンカチを渡す

おい、鼻はかむなよ。

あとはアリシアの蘇生か……何とかできっかなあ？

蓮 side out

第10話 〱テストロツサ家に突撃〱（後書き）

蓮の能力のチート性が明らかに。

次回もよろしく。

第11話 くテストロツサ家その2く

く 蓮 side く

「・・・アリシアを蘇生するって?」

「ああ」

爆弾落としてみた。

ハトが豆鉄砲喰らったかを顔をしてる。

俺たちはアリシアのポッドの前に来ている。

アリシアを火葬しようという話だったのだが。

「あなたさつき『死者を蘇らせることはその者に対する冒瀆だ』って言うってたじゃない」

「それがどうした?」

確かに言ったが。

「なら」ああ言いはしたが、僕はアリシアのことなんてよく知らない「・・・」

啞然としてる。まあそうだろう。

他人にするなと言っておいて自分はするといふのだから。

「僕はねプレシア。あなたの案がフェイトを不幸にすると考えてやめさせようとしたんだよ」

原索ではフェイト1人を残し虚数空間に落下していく。
それは彼女の心に大きな爪痕を残すだろう。

「蘇生する方法に当てがある。だが僕の魔力量では成功しない。
君が海鳴市にジュエルシードをばら撒いたのだから責任を持って回
収してほしい」

プレシアのまいた種だ少しは取ってもらおう。

「そうね。」「でも」・・・まだ何か要求するの?」

「あなたは病気だ。フェイトが手伝ってくれるとありがたい」

フェイトの方を見る。

「母さん病気って・・・」

「ごめんなさい、フェイトもうあまり長くないの?」

「そんな・・・アリシア姉さんが戻ってくるかもしれないのに」

あ、また泣きそうだ。

「私の体には病気がいたるところに転位している。もう食事もでき
ないぐらいに」

「それも当てがある」

優奈に説明すればすぐに治るだろう。

「安心しろ一瞬で治る、善は急げだな」

「私の体は魔法では治らない程よ？あなたでは無理じゃないの？」

「僕には無理だが知り合いにね、回復だけなら神掛かった能力者がいるから」

正体をばらすわけにはいかないからな。一回戻るか。

「少し待っててくれ。連れてくる」

「いいの？」

「寝てたら起こしてくるしね。死にかけてるっていえばすぐに来るだろう」

「ありがとうね何から何まで」

「いいさ、あなたがジュエルシードを落としてくれたことで研究もできたし」

「！あなたジュエルシードの解析もできるといふの？」

「ああ、少し時間はかかったが」

「天才なのかしら？」

「好きなことに熱中しているだけだ」

そう言って転移する。

「ありがとう」

フェイトが礼をいうが。

「まだ何も解決してないだろう?」

場所は海鳴市上空、自宅の真上。
転位はちゃんと成功したようだ。

急いで優奈を探す。この孤児院はだいぶフリーダムになった。
院長先生がしばらく海外に旅行に出かけている。
昔にここを出た先輩が誘ったらしい。

「優奈?どこだ?」

この時間は眠ってるかもな?

「あ、蓮!」

葵が出てきた。

風呂上りなのかやや頬が赤い。

「葵か、優奈はどこだ?」

「優奈は研究室に入って修行してるよ?」

サンキューなどと言って研究室に向かう

研究室の訓練室では優奈がリーシェと訓練しているようだった。

「優奈ちよつといいか?」

「何？どしたの？」

「治してもらいたい人がいる。ヤバめなんだ」

優奈の目が見開かれる。

「今すぐ行く。患者はどこにいるの」

葵もただことではないと思ったのか後ろについてきていた。

「時の庭園」

「え？」

2人とも八モるところだったか今の？

「時の庭園って」

葵が確認してくる。

「プレシアを治療してほしい」

何があつたかを説明する。

「というわけで善は急げだ、今すぐ行くぞ」

優奈を連れて研究室を出る。そして転移。

葵もついてきた2人はローブを着て仮面をかぶる。

「プレシア達の前では『ゴースト』って名乗ってるから。本名、言うなよ?」

「応確認は取っておく。」

「わかったわ」

「戻ったぞプレシア」

プレシア達の所に急ぐ

「は、早かったわね。まだ5分も経ってないわよ?後ろの子たちが?」

「そうだ。1人は何となくついてきただけだな」

「何よ。ゴーストは何も言わなかったじゃない」

「プレシアを治療するって言ったろ?お前は治療系じゃないだろ?」
「そりゃそうだけど、と小さくなる。」

「あなたもゴーストさんのお友達なんですか?」

「うんそうだね。昔からの友達だよ」

「ま、そついう話はあとでもできる。まずは治療な」

「わかった。じゃあプレシアさんそこに座ってください」

プレシアを座らせその前に優奈がしゃがむ。

「では、『彼女を癒して、病魔を消して。』」

優奈が祈るようなポーズをすると2言いう。

こういう言葉に表すことでイメージが定まるらしい。

「どうですか？体が軽くなりませんでしたか？」

「え、ええ不思議な感覚。今なら食欲も湧くわ」

「大丈夫じゃないですか？ゴーストは彼女の様子わかります」

「ああ、さっきまで巣くっていた病巣がすべて消えている」

ちょっとしたゴーグルで見る、試作品『スカウター』

これは見た相手の健康状態、戦闘力を測ることができる。

「治ったの？」

「うん、体力まではまだ戻らないだろうけどちゃんと食べていけば元通りですよ」

「あなたの力でアリシアは？」

優奈の力ではできない彼女のは癒すためのものだから。

「私は治療しかできません。人を蘇らせるなんてとても」

「安心しろプレシア僕は約束を守るよ」

「ええ、信用しているわ」

さて、これからのことだな。

「プレシアがジュエルシードをばら撒いたことで発掘者が出向いて回収してる。

それで現地で魔導師になってしまった少女と現地にいた魔導師と協力してジュエルシードを集めている。

フェイトは現地の魔導師と合流してプレシアのもとに連れてきてくれ」

「わかった」

「私は何をすればいいの？」

プレシアが聞いてくる。

お前が出向いてユーノに謝ればいいんだけど。

「あなたはフェイトを褒めろ」

「え？」

「フェイトに冷たく当たっていたのだろう？」

「だったら今から褒めろ」

「か、母さん。あの、頑張るね」

あ、フェイトの目が輝いてる。

「わ、わかったはフェイト………期待してるわ」

「うん!!」

いい笑顔だな。

「ありがとうゴーストさん。あなたのおかげで母さんともっと仲良くなれたよ」

「そ、そうか。どういたしまして?」

……悪い幸也。フェイトへのフラグ思いつきり折ったかも。

〈 蓮 side out 〉

第12話 くネコガミサマ（前書き）

あのアニメのネコやばくないですか。
ドストライクでしたよ。

第12話 くネコガミサマく

く 幸也 side く

「すまなかった」

俺の目の前には土下座をした蓮がいる。
まるで二次小説プロローグの神様みたいだ。

「どうしたんだ急に？とりあえず顔をあげろよ」

「実は・・・」

蓮は今日フェイトの家に行つてやらかしたことを説明した。

「そっかプレシアはもうフェイトに虐待しないのか。で、どうしてあやまるんだ？」

「治療してアリシアを蘇生するって約束したんだけど・・・フェイトに尊敬の眼差しで見られてるんだ」

は？尊敬なら別にいいだろ？
葵も会話に入ってくる。

「残念ながらあれはもう恋する乙女の顔だったね」

な・・・んだ・と

「そつだねあれはそついう顔だった。

優奈も同意する。

そんな俺のハーレムが・・・

「本当に、すまなかつたと、思っている」

まあ反省しているならいいんだが。

ハーレムの道は長いな。

いや、ほんとに今からなのは一択でもと思うんだがあの野郎に
すずかもアリサも毒牙にかけられると思うと怒りがわいてくる。

「まあ、偽名だし仮面で素顔隠したし、認識阻害のローブも来てた
し。」

アルフが日常で俺に気づくことはないな。誰かがばらさなければ「
蓮はそう言うがフェイトがこのまま蓮を好きになってくれたら、
葵が、でもフェイトにも幸せになってほしいし、葵は幼馴染だし。」

「そ、それでこれからどうするんだ？」

蓮に聞いておくこいつのおかげでフェイトの暗い記憶はなくなりそ
うだ。

あとはジュエルシードをすべて揃え・・・。

あれ・・・なのはとフェイトの友達フラグ折ってね？

「ああ、フェイトはなのは達に合流させて一緒にジュエルシードを
集めてもらうことにした。」

そっか、これで友達になるわけだ。でもそれだとなのは強化フラグ

が結構折れてるんじゃない？

「まあ今回の事件についてどうして起こったのかユーノへ説明させるしな」

「管理局はどうなってる？」

「ユーノが事前に管理局に報告していたのかもしれないが動きが早いぞ。」

「そろそろ出張って来るかもな。」

イレギュラーがなければ万事オツケーてか用意周到だな。さすがだ。

「明日はさすがの家に行く」

そう、原作だとフェイトが現れる日。今回は味方だがな。

「フェイトはリリースと行動している。なのはに攻撃を仕掛けることはないだろう」

リリースも一緒かあのバカが攻撃を仕掛けそうだな

「で、アリシアの蘇生なんだが・・・ジュエルシードの魔力を使う」

「！？大丈夫か？大魔導師であるプレシアでも制御が難しそうだったんだぞ」

「ジュエルシードは解析したうまく扱える」

蓮は真剣だ。この状態の蓮はとにかく嘘を吐かない。できないこと

は言わない。

「任せるぜ親友」

その言葉に目を丸くする。こいつのこの顔は久しぶりだな。

「ああ、任せる親友」

互いに拳をぶつける。

「男って……」

葵が呆れている。

「今日は騒ぐぜ。宴だ!!」

「優奈がもう寝てるんだ。明日な」

テンションが低い。俺をもてあそんだな？

〈 幸也 side out 〉

〈 フェイト side 〉

私はアルフとリリースさんと共にジュエルシードの気配を辿って森の中に来ていた。

ゴーストさんは来ていない。……会いたいなあ。

リリースさんに聞いてみる。

「あのリリースさん。ゴーストさんは来ないんですか？」

「ええ。主は忙しいようですね。研究室に入り浸っております」

ゴーストさんは来ないのか。

「フェイトまた会えるよ、安心して？」

アルフもこう言ってくれるし大丈夫だよね。

「！ ジュエルシードの反応を確認」

リリースさんが突然告げる。発動してしまった。

確かに魔力反応がする。！結界が張られた。

あれはネコさんなのかな？子猫がそのままおつきくなったようだ。

「／／／ かわいい」

「リリースさん？」

「はっ！私は何を」

かわいいものが好きなんだね。

「フェイトちゃん、あの白い服の子が民間協力者で肩に乗っているのが例の被害者」

そうかあの動物が母さんが迷惑をかけてしまった。

あとでちゃんと謝らないと。

「それである銀色のコートの子が現地にいた魔導師。話しかけてお

いで」

リリースさんは後ろを向く

「どうしたんですか？」

「ちょっと熱烈な視線がですね。追っかけの方が近くにいるようなので注意してきます」

そう言ってどこかに向かう

「フェイト。まずはあの子たちに合流しないと」

そうだねあとで聞けばいいか。

それにしてもストーカー？だったかな母さんが気を付けなさいって言ってたんだよね。

危ない人だって母さんを治療してくれた人も言ってた。

「よし行こう、アルフ」

私はアルフとネコさんの下へと向かう。

＼ フェイト side out 〉

＼ なのは side 〉

今日はさすがちゃんのお家にお呼ばれされたんだけどジュエルシードが発動してしまっただ。

今日は幸也君だけ、アルトリア君は呼ばれなかったの。

でも、今日は特訓の成果を見せるチャンス。

「幸也君。今日はひとりでやらせて」

幸也君はオーケーしてくれた。
よし行くよ。でも

「・・・ネコさん？」

ジュエルシードは願いを叶える。

子猫の願いであるおつきになりたいというものが今の状況になってしまったのでは。

とユーノ君が説明してくれたが、これはちょっと

「大きくなりすぎかも・・・」

「ああこんななりでじゃれつかれたらと思うと」

ぶちん。

「いやきつとぶちゅんだな。どちらにしてもユーノに未来はないな」

「ちよつと!?!?」

「見てみるあのネコお前のことを見てるぞ」

「え?」

ユーノ君がああ猫をよく見ると・・・確かに見ている。すっぴい見ているの。

「と、とりあえずなのは。封印しよう」

「そ、そうだね」

私が覚えたのはアクセルシューターという射撃魔法まだ命中率は低いけどあの大きさなら。

「行くよ！シュート！」

3つの球体がネコさんに向かう。
全弾命中このまま一気に封印。

「なのは！」

ネコさんは跳んだ。あの大きさなのに早いやられちゃう。
潰されちゃう直前黄色い光が飛んできてネコさんにあたる。え？
幸也君じゃないみたい、ならだれが？

そこには黒衣のマントを着た。金髪の女の子がいた。

＼なのは side out ！

＼幸也 side ！

フェイトが現れた途中から気づいたので今のピンチをフェイトに任せただが。

これでなのはとフェイトが友達になってくれるとありがたい。

「あなたは？」

なのはがフェイトに聞くが、フェイトはそれには答えなかった。

「自己紹介はあとで、今はジュエルシードの封印を」

「う、うん」

そうだなあの猫は脅威だ。意外と速いな。
かわいい外見で敵を惑わす。
それはなのはもフェイトもか？

そのあとはあっけなかった。
アルフとユーノでネコを動けなくし、なのはとフェイトの砲撃で沈める。

「あなたは？」なのはは一回戻るぞ。アリサ達が待ってる「え？でも・・・」

「大丈夫だよこの公園に来て。デバイスに地図を送るから」

フェイトは行ってしまった。

「ほら、なのは。早く戻らないと心配してるぞ？」

「そうだね」

また会えるからさ。

しかしアルトリアの奴来なかったな。

呼ばれなくてもジュエルシードが発動したら飛んでくるだろうに。
まあいいかいなきゃいないで。

俺たちは屋敷へと戻って行った。

)
幸也
s
i
d
e
o
u
t
)

第12話 くネコガミサマ（後書き）

フエイト・・・どうしようか

やらかしちゃったな。

『反省はしてる。後悔はしてない』とは言えないんだよ。
半々みたいな

そういえばネタは基本的にうる覚えです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887ba/>

転生して目指すはサポート役

2012年1月13日00時46分発行